

関根伸夫との旅

小清水漸

関根伸夫と私は、旅先でよく会話を交わした。旅を共にする、というより同じ展覧会に共に出品する機会に恵まれたからであった。

初めての旅は、言うまでもなく1968年神戸須磨離宮公園での「位相大地」制作に携わった数週間である。関根と私と吉田克朗と櫛下町順子と上原貴子と5人の合宿のような日々であった。

この旅は、連日朝から穴を掘り土を積み上げる肉体労働と、国民宿舎の一室で夜毎の賑やかな会話の集積であったが、これは私達にとって奇蹟の体験といっても良いものであった。

毎日の労働が果たしてどの様な成果を生み出すのか、五里霧中の始まりから日ごとに流した汗の分だけ少しずつ霧が晴れて行き、最後に爆発するような歓喜で「位相大地」の完成を見たのであったが、50年を経た今でも合宿した5人が共有し共感する安堵と信頼のもとになったと思う。

次の旅先は、1971年コペンハーゲンのルイジアナ美術館のゲストハウスである。

1970年のベニスビエンナーレから引き続きイタリアに滞在していた関根と、71年のパリビエンナーレに出品した私が、コペンハーゲンで合流し、ひと月余りを共に過ごしたのである。

夜ごと酒を酌み交わしながら、会話し議論し時に激高し、互いの美術論、制作論を重ねていった。このときの体験は、天才関根伸夫と私の相違と共感を明らかにしてくれたと思う。

帰国後関根は環境美術研究所を興し、私は斎藤義重の戦禍で失われた作品の再制作に携わっていた。斎藤先生の制作助手としての先輩である関根は、時折現場に顔を見せ、時に手伝いをしていった。

再制作作業の中での楽しみの一つは斎藤先生との対話であったが、関根がそこに加わったときには話が弾み、二人は互いに気を許しあい認め合っていることが伝わってきた。

翌年私は制作拠点を関西に移し、環境美術研究所のプロジェクトに忙しくしていた関根とは直接会う機会も少なくなっていたが、美術館での展覧会や画廊での個展の際には顔を合わせた。不思議に、それがたとえ久しぶりであっても、顔を見た瞬間から互いの距離は須磨で共有した空間に立ち返っていた。

その後もパリや、アントワープや、ベニスや、北京といった旅先で出会い、会話を繰り返したが、2001年のケンブリッジでの会話は忘れがたいものとなった。

5月の晴れ渡った空を仰ぎながら、ボートの行き交う運河を見渡す芝生の木陰に腰を下ろし、共に歳を重ねたせいかゆったりと、話すでもなく黙るでもなく初夏の風に吹かれていた。

ぽつりぽつりと話すうち、またポツリと「斎藤先生が悪いらしいよ。」と関根が言った。「95歳だものな。」

関根にしても私にしても、どこかで父性としての斎藤義重の不死を漠然と思っていたし、願ってもいた。

翌月斎藤義重が永眠した。私は美術上の父性の喪失感を感じていたが、関根はどうだっただろうか。

それから10年を経てロサンゼルス画廊で出会うことになった。私が作品展示の準備作業をしているところに、遅れて関根がやってきた。彼の展示作業にはまだ間があったから、関根は私の作業を手伝い始めた。

二人が冗談を言い合いながら作業をしている光景は、どうやらアメリカ人ギャラリストの目には不思議に映ったようだった。作家同士が和気藹々と作業を手伝い合う、という光景が信じがたいものであったようだ。

私達二人にとっては当たり前で、出会った瞬間に50年前の共有した時空に立ち返ってしまうのであった。もしそこに吉田克朗が居たら、もっと賑やかであっただろう。

関根伸夫と直接会話をしたのはロサンゼルス彼の自宅が最後であったかもしれない。本当なら2019年1月12日に台北で酒を酌み交わし、久しぶりの会話を愉しむはずだった。

しかし体調を崩した関根は台北には現れなかった。彼の新作だけが画廊に届いていた。その作品に私はある種の充実を見た。関根伸夫自身が手応えを感じているはずだと思った。

それから数ヶ月、関根伸夫は旅立って行った。独りで。

斎藤義重の旅立ちに父性の喪失を感じた私は、関根伸夫の旅立ちに兄心（このかみごころ）の喪失を痛切に感じている。